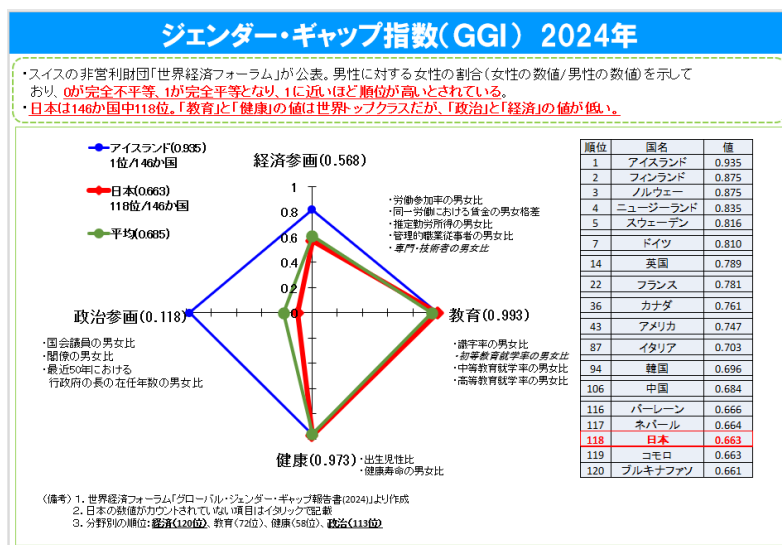


ジェンダー平等社会を目指して～第一歩を踏み出そう～

「ジェンダー平等」とは性別に関わらず、平等に責任や権利や機会を分かちあい、あらゆる物事を一緒に決めていくことを意味しています。しかしながら、今の社会では性別により生き方や働き方の選択肢や機会が決められてしまったり、格差が生じたりすることがあります。この格差を「ジェンダー・ギャップ」と呼び、ジェンダー・ギャップを解消し、ジェンダー平等な社会を実現するために、世界各国で法や制度の整備、教育、啓発など、様々な取組が進められています。

各国のジェンダー・ギャップの現状を評価する国際的な指標が「ジェンダー・ギャップ指数」です。スイスの非営利財団「世界経済フォーラム」が、各国を対象に、経済・教育・健康・政治の4分野について男女間にどれだけの格差が存在しているのかを分析して算出し、毎年公表しています。直近に公表された2024年版によると、日本のジェンダー平等達成度は146か国中118位でした。過去最低の順位(125位)だった2023年よりも少し持ち直したものの、依然として先進国では最低クラスであり、世界各国がジェンダー平等に向けた取組を加速させている中で、日本は大きく遅れを取っているといわれています。



(内閣府男女共同参画局HPより引用)



ジェンダー平等な社会の実現のためには、社会構造の変化が必要不可欠です。そしてそのためには、法の整備や制度の構築を推進するだけでなく、私たち一人一人がジェンダーと向き合い、思考や価値観をアップデートしていくことが重要です。意識が変われば行動が変わり、行動が変われば社会規範が変わり、そして新たなジェンダー観が生まれ、やがて社会が変わるのではないのでしょうか。

さてここまで読んで、皆さんはどう感じられましたか?もしかしたら、なんとなく座り心地の悪いようなモヤモヤするようなそんな気持ちになった人もいるかもしれませんね。少なくとも私は、ジェンダーの問題を話題にすると、少しだけせわせわと落ち着かない気持ちになります。変化していく社会への戸惑い、新しい価値観と古い価値観のせめぎあい、そして何より、「女(男)は～」「私の周りでも～」といったような自身の性別や個人的経験を思考の拠り所にしてしまっていないかという恐れ。性別という属性は己の全てではありません。けれども自身と完全には切り離せない要素の一つであり、ともすればその属性の代表として「男と女どちらがつかいか」等といった自身の立場や感情を主張してしまいがちな要素でもあります。

まずは、自身の属性にとらわれず、それぞれのジェンダーによって経験する社会構造的な不平等を知り、俯瞰的に検討することが、ジェンダー問題を解消する第一歩であるように感じています。私自身もそのような視点を忘れずにいたいと考えています。